

# BOOK REVIEW

人生のヒント  
VOL.6



このコーナーでは、  
毎回異なるブックナビゲーターに、  
人生やライフプランを考える上での  
ヒントとなる本をご紹介します。

REVIEW. 2

## トライアウト

藤岡 陽子 著



[光文社文庫、2015年3月、  
756円]

「トライアウト」とは、プロ野球の戦力外通告を受けた選手の再チャレンジのテストのことである。この小説は、野球選手・深澤と新聞記者・久平可南子そしてその家族や、周辺の人たちそれぞれの再生の物語でもある。この小説の素晴らしいのひとつは一度挫折した人間の再挑戦への勇気だと思う。また、藤岡陽子さんの作品では、不器用でも一生懸命に生きている人間の姿を丁寧に描き、普段は気づかないその人たちの存在にも気づかせてくれる。子ども同士のトラブルの場面では、家族それぞれの心の葛藤や思いを鋭くかつ魅力的に丁寧に描いている。それらは心の機微に触れ、読者にも生きる勇気を与えてくれる。特に子育て中のお母さんにはお薦めしたい。

ブックナビゲーター  
りゅうしょうかん  
隆祥館書店

大阪市中央区で昭和24年創業。平成23年から「作家と読者の集い」というトークイベントを毎月数回開催し、作家がその思いを読者に、読者が作家にその感想を直接伝える、「心の交流」ができる場を作っている。



REVIEW. 1

## 典獄と934人のメロス

坂本 敏夫 著



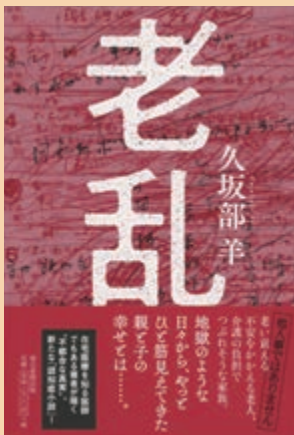
[講談社刊、2015年12月、  
1,728円]

これは、刑務所長が「典獄」とよばれていた時代の奇跡を越えた物語。関東大震災の渦中に究極の絆を結んだ人々。こんな素晴らしい日本人がいたのか？と魂をゆさぶられるような衝撃を受けた。当時の記録を元刑務官でもある著者が30年かけて取材し書いた。横浜刑務所の外堀は全壊し、大規模火災が迫ってきた。東大法学部を出て刑務所の所長を志願した椎名「典獄(刑務所長)」は、当初から囚人たち全員の名を覚え「囚人に鎖と縄は必要ない。刑は応報・報復ではなく教育であるべきで、その根底に信頼がなければならぬ」と考え実践した。監獄法第二十二条に基づき囚人たち全員を解放するが、死者を除き、なんと全員が帰ってきた。90年間歴史から抹殺されていた史実である。

REVIEW. 3

## 老乱

久坂部 羊 著



[朝日新聞出版刊、2016年11月、1,836円]

在宅医療を知る医師でもある著者が描く、当事者にしかわからない切実な思いを共有できる認知症をテーマにした小説『老乱』。老い衰える不安をかかえる老人、かたや介護の負担で押しつぶされそうになっていく家族。この本の特徴は、介護者側か、認知症の本人かのどちらかの視点ではなく、その双方から同じ事象がどのように見えるのかを描く。双方の視点から、やっと見えてくる本当の意味での親と子の幸せとは？ 最後にはひと筋の明るい光の見えてくる感動の長篇小説。介護保険、在宅介護、介護施設、精神科病院の療養まで、認知症介護のすべての過程が書かれているので、実際に必要な情報も参考にさせていただける。現在介護されている方にも、きっと勇気を与えてくれる。